

性格類型別グループのサッカースキルの 学習能力について

小原 史朗・太田 和義*

The Learning Ability on Football Skill in Personality Type Groops

Shiro OHARA, and Kazuyoshi OHTA

The learning ability on football skill in personality type groups has been analyzed. In 1979, the Yatabe-Guilford Personality Test, the Physical Fitness Test and a skill test, were administered to 87 male freshmen at the Aichi Institute of Technology. Groups based on the personality type classified as shown in table 1. Using the t-test, we examined the learning ability of each groups.

The Calm type groups were inferior in physical fitness to the Behavior type groups and the Average type ones, but were equal in learning ability to the both groups.

The Average type groups were equal in physical fitness to the Behavior type ones, but were superior in learning ability to the Behavior type ones.

はじめに

集団種目¹⁾としてのボールゲームの技術は、通常、小集団で学習される。正課体育の授業におけるこの小集団は、個人の体力、運動能力および技能のレベルを考慮して編成されることが多い。本研究では、これらのレベルによらずに、性格類型の相違によるグルーピングを行ない、性格とサッカースキルの学習能力の関係を明らかにしようとした。

ドリブリング、パス（キッキング）およびトラッピングは、サッカーのゲームを行なううえで欠かせない基本的技術である。それ故に、正課体育の授業においては、これらの技術の上達をめざす学習が重点的に行なわれる。そこで、本研究では、上述の3つの技術を組み合わせ、正確さとスピード²⁾を要求するスキルテストを設定し、これを学習させることとした。

性格類型別グループのサッカースキルの学習能力を分析するにあたって、体力測定およびグループメイトとして望む性格特性調査の結果から次の3つの仮説を説定し、検討を加えることとした。

仮説1. 体力が高い性格類型グループは、体力が低い性格類型グループよりもスキル学習能力が高い。

仮説2. 性格類型グループ同士で体力に差がなければ、グループメイトとして望む性格類型が一致する性格類型

グループは、そうでないグループよりもスキル学習能力が高い。

仮説3. 性格類型別グループ同士に体力差がなく、しかもグループメイトとして望む性格類型が一致しないならば、そのグループ間にスキル学習能力の差が生じない。

方法

I 調査期間

1979年4月～7月

II 対象

正課体育の授業においてサッカーを選択した本学1年男子87名、(機械工学科43名、経営工学科44名)

III 測定項目および結果の処理

1) 体力

対象学生の体力の現状を把握するため、4月に体力測定を実施した。種目は、①背筋力、②垂直とび、③反復横とび、④立位体前屈、⑤踏台昇降運動、⑥上体おこし、であった。

それぞれの種目の全国平均値と標準偏差³⁾を用い、 $M \pm \frac{1}{2}S \cdot D$ 法により1点から5点までの5段階に得点分類し、各個人の総合点を算出した。この総合点は、平均が19.50点、標準偏差が2.73、最高が24点、最低が13点という分布であった。これをさらに $M \pm \frac{1}{2}S \cdot D$ 法で、上位群($X \geq M + 0.5 S \cdot D$:21点以上)、中位群($M - 0.5 S \cdot$

*名古屋市立大学

D < X < M + 0.5 S・D:19点~20点), 下位群 (X ≤ M - 0.5 S・D:18点以下) の3群に分類した。なお, 1種目でも記録が欠けるものは分類対象から除外した。

2) グループメイトとして望む性格類型

サッカーの授業でチームあるいは練習グループを組む場合, 同じ集団の一員としてどのような性格類型のものを望んでいるか, について4月に調査した。この調査には矢田部一ギルフォード性格検査(以下Y-G検査と略記する)の120の質問項目をそのまま利用した。例えば, 「色々な人と知り合いになるのが楽しみである」という質問項目について, こういう人がグループメイトとして望ましいと思えば○印を, 望ましくないと思えば×印を, よくわからなければ△印を記入させた。

3) 性格検査およびグループ編成

Y-G検査を4月に実施し, A.B.C.D.E型の5類型に分類した。次に, この結果にもとづき, 1グループの構成員数を4人として同類型のもの同士のグループ分けを行なった。類型の異なるもの同士のグループを混合類型としたが, 本研究では考察の対象から除外した。各グループにおける性格型(典型, 準型, 亜型)の内分けは表1のとおりである。

表1 各グループにおける性格型の内分け(人数)

I	A	B	C	D	E	混合
	II	aaaaa	bbbbbb	c	ddddddd	e
III	12345	12345	1	123456	1	123
典型	10300	00020	4	440440	1	000
準型	10140	44021	0	004004	1	212
亜型	24004	00403	0	000000	2	232

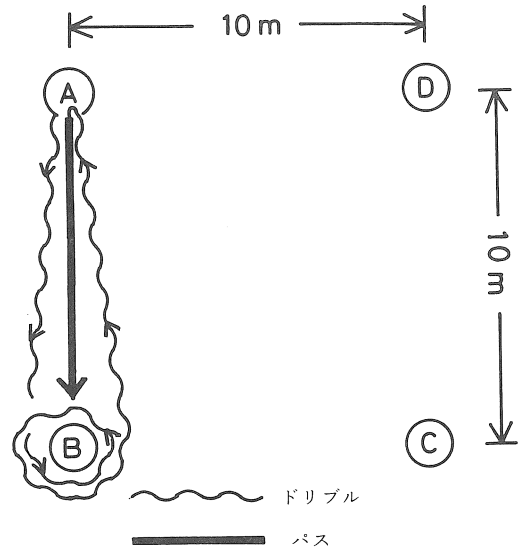
注) I…性格類型 II…グループ III…性格型
 注) 混合型グループにおける性格型の内分けは次のとおりである。
 m1…準型(E 2名), 亜型(E 1名, C 1名)
 m2…典型(C 1名), 準型(D 1名), 亜型(B 1名, D 1名)
 m3…準型(B 1名, D 1名), 亜型(B 1名, D 1名)

4) スキルテスト

サッカーの基本技術であるドリブリング, パス(キッキング), トラッピングを組み合わせ, 正確さとスピードを必要とするスキルテストを5月から7月まで, 週1回の授業の中で計8回にわたって実施した。このテストの実施方法は次のとおりである(図1)。10m間隔の仮空の正方形の頂点にそれぞれ直径1mのサークルを描き, その中に同じグループのものが1人ずつ入る。スタートの合図でAはBの方へドリブルで進み, Bの周囲を1まわり半したのち, 同じくドリブルで自分のサークルに戻る。

サークル内に辿り着くと, 振り向いてBへインサイドキックでパスを出す。Bはそのパスをサークル内でトラップし, Cの方向へドリブルで進む。(パスされたボールがサークル外に来た場合には, トラップしたのち必ずサークルに戻ってからドリブルを開始する) 以下各人がAと同様のことを行ない, DからのパスをAがサークル内で受け止めた時点でテストは終了し, そのタイムを計測する。

図1 スキルテストの方法



結果

I. 体力

図2は, 各性格類型の体力の上位群, 中位群, 下位群の割合を示したものである。X²検定の結果, C型の学生はB型の学生に比較して5%水準で有意に体力の低いものが多いことが認められた。また, 有意水準にこそ達し

図2 性格と体力の関係

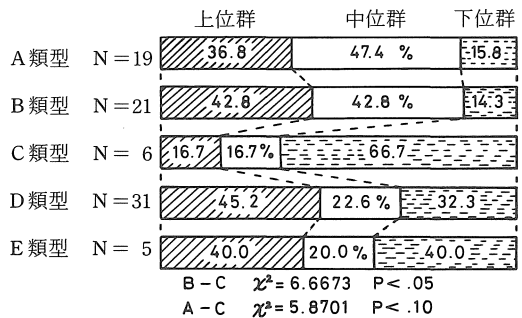


表2 性格類型別の体力

性 格 類 型	人数	背筋力 (kg)	垂直とび(cm)	反復横とび(回)	立位体前屈(cm)	踏台昇降運動	上体起し(回)
		MEAN(SD)	MEAN(SD)	MEAN(SD)	MEAN(SD)	MEAN(SD)	MEAN(SD)
A類型	21	146.1(16.7)	65.5 (5.3)	50.0 (3.6)	16.3 (5.0)	58.8 (9.0)	24.9 (5.9)
B類型	23	147.3(20.4)	64.7 (6.1)	49.2 (3.5)	15.5 (6.2)	57.7 (6.4)	24.9 (4.3)
C類型	7	131.0(22.6)	64.0 (4.1)	49.0 (4.0)	16.1 (2.0)	49.5 (4.4)	25.9 (3.7)
D類型	31	146.4(22.6)	66.5 (7.1)	47.9 (3.3)	16.5 (4.8)	57.9 (9.0)	24.1 (3.3)
E類型	5	171.2(35.0)	65.6 (8.8)	47.4 (1.7)	16.7 (4.9)	54.9 (4.3)	22.6 (3.5)
t 一 値		E-C 2.202 [△] E-D 2.024 [△]		A-D 2.113*		B-C 2.865** A-C 2.366* D-C 1.849 [△] E-C 2.165*	

注) ●反復横とび D類型 30名 ●立位体前屈 B類型 22名, C類型 6名 ●踏台昇降運動 B類型 22名, C類型 6名

**……P<.01, *……P<.05, △……P<.10

なかったが、C型の学生はA型の学生に比較しても体力の低いものが多い傾向にあった。

表2は、それぞれの性格類型の体力を種目別にt検定したものである。この結果、A型の学生がD型の学生に比較して5%水準で敏捷性(反復横とび)に優れ、心肺持久性(踏台昇降運動)に関しては、B型の学生が1%水準で、A型およびD型の学生が5%水準でC型の学生に勝っていることが認められた。

II グループメイトとして望む性格類型

表3は、それぞれの性格類型のものが、グループメイトとしてどのような性格特性を有するものを望んでいる

かについて検討したものである。D型の学生はB型の学生に比較して性格特性因子Nの得点が低いもの、すなわち、より神経質でないものを望んでいることが認められた。また、D型の学生はA型の学生に比較して性格特性因子Aの得点が高いもの、すなわち、より支配性の大的ものを望むことが確認された。

各々の類型のものが要望している性格特性因子の得点をプロフィール化すると、すべての類型のものがD典型のものをグループメイトとして欲していることが顕現された。

表3 性格類型別のグループメイトとして望む性格特性因子得点

I II III	A類型 N=19		B類型 N=22		C類型 N=6		D類型 N=28		E類型 N=5		t-Ratio
	M	S D	M	S D	M	S D	M	S D	M	S D	
D	3.89	3.5	3.64	3.6	4.50	3.1	2.39	3.5	3.00	2.4	
C	6.58	3.5	7.09	5.0	6.83	3.5	4.96	3.4	4.80	3.1	B-D 1.757 [△]
I	3.37	2.4	4.45	4.4	3.50	2.2	2.71	2.8	3.60	2.3	
N	3.47	3.4	4.73	4.0	4.17	2.5	2.68	3.0	3.20	2.1	B-D 2.020*
O	6.84	2.8	6.77	4.1	9.00	3.4	6.14	3.3	5.00	3.6	C-D 1.844 [△]
Co	4.53	2.5	5.00	3.7	4.33	2.6	3.46	2.9	3.00	6.0	
Ag	11.53	3.3	12.23	3.0	11.33	1.9	11.25	4.0	10.80	3.1	
G	17.47	3.1	18.05	3.1	18.17	2.2	17.46	3.1	17.80	1.8	
R	13.21	3.3	13.45	4.8	14.00	2.9	13.00	3.2	12.60	1.4	
T	12.63	4.1	12.55	3.6	12.17	2.1	13.96	2.7	12.20	4.7	
A	15.16	3.1	15.27	4.3	14.00	3.7	16.79	4.9	16.00	2.8	D-A 2.063*
S	16.21	2.7	16.86	2.9	15.67	1.9	17.71	2.3	16.20	1.6	D-A 2.004 [△] D-C 1.992 [△]

注) I. 性格類型・人数 II. 平均値, 標準偏差 III. 性格特性因子

III スキルテスト

表4は、各グループのスキルテストの各回の成績を示したものである。なお、ここでは記録を示すにとどめ、各グループ間の平均値の差の検定は行なわなかった。

表5は、それぞれのグループの記録を類型ごとにと

めて検定した結果を示したものである。A類型と混合類型の両グループはB類型グループに比較して1%水準で優れており、E類型グループは混合類型グループに比較して1%水準で優れていた。

表4 性格類型別グループのスキルテスト結果

III	II	I								平均値(秒) (標準偏差)
		1 5/22	2 5/29	3 6/5	4 6/12	5 6/19	6 6/26	7 7/3	8 7/10	
A	a 1	60.0	57.0	54.0	57.8	55.9	58.2	52.9	55.1	56.4 (2.2)
	a 2	59.0	56.4	59.0	65.0	54.0	61.0	61.0	56.0	58.9 (3.3)
	a 3	64.0	63.0	55.3	66.3	57.0	58.2	62.0	57.3	60.4 (3.7)
	a 4	60.0	54.0	53.0	50.0	50.7	51.0	54.0	59.0	54.0 (3.5)
	a 5	54.5	53.5	60.0	53.0	57.0	51.0	60.0	55.0	55.5 (3.1)
B	b 1	63.0	65.0	65.3	58.4	58.1	60.7	60.1	57.1	61.0 (3.0)
	b 2	64.0	59.0	59.0	66.0	59.8	67.8	54.2	55.3	60.6 (4.6)
	b 3	61.0	64.0	63.4	60.0	61.6	67.0	59.9	57.1	61.8 (2.8)
	b 4	54.0	68.0	56.0	68.0	52.5	56.0	50.0	59.0	57.9 (6.3)
	b 5	57.0	58.0	61.0	57.0	58.0	72.0	56.5	56.0	59.4 (5.0)
C	c 1	71.0	70.7	57.8	61.7	57.6	54.0	55.0	55.0	60.4 (6.5)
D	d 1	55.0	53.0	54.0	69.1	57.4	64.0	46.4	60.0	57.4 (6.6)
	d 2	76.0	61.3	63.3	54.3	57.7	54.7	54.7	57.1	60.3 (6.6)
	d 3	60.0	63.0	55.0	68.7	52.0	56.3	49.8	49.0	56.7 (6.4)
	d 4	62.5	58.0	64.0	60.0	56.0	56.0	58.0	60.0	59.3 (2.7)
	d 5	69.0	64.0	58.0	61.0	59.9	53.3	50.9	57.3	59.2 (5.4)
	d 6	60.7	61.0	63.0	59.0	55.0	52.0	65.0	58.0	59.2 (3.9)
E	e 1	53.5	55.0	51.0	49.4	57.0	53.8	50.8	54.0	52.9 (2.1)
混合	m 1	67.0	62.7	56.1	56.0	55.7	58.3	61.0	52.0	58.8 (4.4)
	m 2	58.0	57.0	56.7	58.0	54.1	57.8	57.0	54.0	56.6 (1.5)
	m 3	57.0	60.0	52.0	60.0	57.4	55.0	55.0	50.7	55.9 (3.2)

注) I……測定日, II……グループ, III……性格類型

表5 性格類型別グループのスキルテストの総合成績

	測定数	平均値(秒)	標準偏差	t一値
A 類型グループ	40	57.03	3.94	A-B 3.213**
B 類型グループ	40	60.15	4.71	A-C 1.941 [△]
C 類型グループ	8	60.35	6.46	M-B 2.824**
D 類型グループ	48	58.61	5.63	E-M 3.154**
E 類型グループ	8	52.90	2.08	
混合類型グループ	24	57.02	3.47	

**…P<.01

△…P<.10

考察

対象学生の性格類型別の人数比は、A型が24.1%、B型が26.4%、C型が8.0%、D型が35.6%、E型が5.7%であり、藤本ら⁴⁾の一般高校生の結果と比較すると、E型の割合がやや小さいが他の型はほぼ同じ割合であったといえよう。しかし、大学生を対象とした太田ら⁵⁾の結果とはB型、C型、E型に著しい相違が認められた。

上位、中位、下位3群の体力分布を類型別に比較すると、C型はB型よりも有意に体力の低位者の割合が高く、種目別にみても踏台昇降運動で劣ることが認められた。また、C型はA型に比較して体力分布で有意な関係こそ認められなかったが、低位のものが多い傾向にあり、種目別でも踏台昇降運動で劣っていた。この結果から、C型はB型に対してのみならず、A型に対しても体力が劣っていたとみなすことができよう。

体力または運動能力と性格の関係进行分析した研究は多い。徳永ら⁶⁾は男子大学生を対象として体力診断テストによる体力と性格類型との関係进行分析した結果、D類型の学生がE類型の学生に比較して体力が高いと報告している。また、太田ら⁵⁾は同様に男子大学生における運動能力と性格類型の関係について、D類型のみならずB類型もE類型に比較して運動能力が高いとしている。対象年齢、性などの違いこそあれ、これらの例と同様の結果を見出ししている研究⁷⁾⁸⁾⁹⁾は多い。しかし、本研究結果のようにB類型がC類型に勝るという結果を示した研究例¹⁰⁾は少ないといえる。

次にグループメイトとして望む性格類型について検討したところ、すべての類型のものがD典型のものをグループメイトとして欲していることが顕現された。この結果から、本研究においては、D類型グループのもののみがグループメイトとしての性格類型に関する要求が一応満たされたことになる。一般に、D典型のものは対人関係の間で問題を起こすことが少なく、行動や積極的だとされている¹¹⁾。共通の目標や活動をもち、成員に対面的な相互作用が存在し、われわれの集団であるという意識をもつスポーツ集団¹²⁾には、活動的で情緒が安定しており、協調的で適応能力の高いD典型のものがふさわしいと考えるのは至極当然であるといえよう。

体力およびグループメイトとして望む性格類型についての検討結果からみて、はじめに設定した3つの仮説は次のように詳述することができる。

仮説1. C類型グループは、B類型およびA類型の両グループに比較してスキルテストの成績が劣る。

仮説2. D類型グループはスキルテストの成績が最もよい。

仮説3. A・B・Eの各類型グループの間ではスキルテストの成績に差が生じない。

性格類型別グループのスキテストの成績をも検定した結果にもとづいて、この3つの仮説を検討していくことにする。

C類型グループは記録的には最もよくないが、B類型およびA類型の両グループとの間で有意差が認められなかったことから、仮説1は棄却されたといえる。

D類型グループは他の類型グループに比較して有意に劣る結果こそ表出されなかったが、記録的には3番目(混合類型グループを加えれば4番目)であったことから、仮説2も棄却されたことになる。

A類型グループとB類型グループの間で有意差が確認されたことから、仮説3も棄却されたといえる。

以上すべての仮説が証明されなかったことから、次のことが明確となったといえよう。

- (1) 性格類型によるグルーピングを行なった場合、グループ間の体力とスキル学習能力には何らの相互関係はない。
- (2) チームメイトとして自分が要望する性格類型のものとグループを共にできようと思えば、そのことがグループとしてのスキルの学習能力に何らかの作用をおよぼすことはない。

本研究においては、C類型およびE類型に属する学生が極めて少数であったため、上記の結果が一般的なものと考えするには多少疑問が残る。今後の継続研究で明らかにしていきたい。

最後に、仮説1と3に関与していたB類型の結果に注目して検討を加えることにする。B典型のものは、情緒性は不安定で、社会的適応性は不適応で、向性は外向という特性をもち、対人関係で問題を起こしやすいとされている¹¹⁾。体力的には優れていたにもかかわらず、グループを組んだ場合の学習能力が劣っていた本研究結果から結論づけるのは早計かもしれないが、B型同士によるグルーピングは体育指導者として避けた方がよいと思われる。

要 約

本学1年男子学生84名を対象として、性格別グループのサッカースキルの学習能力を分析した。体力およびチームメイトとして要望する性格類型についての調査結果から、性格類型グループとスキルテストの成績に関する仮説1, 2, 3を設定し、この分析を試みた。仮説はすべて棄却された。おもな結果は次のとおりである。

1. C類型グループはB類型グループおよびA類型グループに比較して体力に劣っている。

2. すべての性格類型のものが、グループメイトとしてD曲型のものを望んでいる。D類型の学生はB類型の学生に比較して、神経質でないものを望んでいる。また、D類型の学生はA類型の学生に比較して支配性の大的ものをグループメイトとして望んでいる。

3. A類型グループはB類型グループに比較してサッカースキルの学習能力が高い。

参考文献

- 1) 藤原健固：スポーツと社会化 87 道 and 書院，東京，1976
- 2) 新田純興，福島玄一，多和健雄，村岡博人：図説サッカー事典，84—85，講談社，東京，1971
- 3) 東京都立大学身体適性学研究室編：日本人の体力標準値—第二版，不味堂，東京，1975
- 4) 藤本実雄，松本壽吉，岡部弘道，徳永幹雄，小宮秀一：運動類型についての研究—スポーツの進路指導と体力増強を目的とした—，体育学研究，18(1) 31—40，1973
- 5) 太田和義，原田碩三，新畑茂充：学生の体格，運動能力，血液型と性格との関係について，名古屋市立大学教養部紀要 23 1977
- 6) 徳永幹雄，橋本公雄，千綿俊機：学生の体格，体力，性格の相互関係，体育学研究，16(2) 109—113，1971
- 7) 直塚鉄太郎：中学校期の主として体型，性格より見たる運動能力の特性について，体育学研究，14(5) 71，1970

- 8) 戸村博之：児童の運動能力と心理的特性に関する研究，体育学研究，23(2) 173—181，1978
- 9) 太田和義，新畑茂充：高校生の性格と体力の関係，名古屋市立大学教養部紀要，25 1979
- 10) 太田和義，女子学生の性格と体格・運動能力との関係について，日本体育学会第29回大会号，167 1978
- 11) 江口恒男：性格診断マニュアル，49 株式会社テクノ，東京，1976
- 12) 松田岩男：現代スポーツ心理学，170，日本体育社，東京，1967

(受理 昭和55年1月16日)